



中村俊定文庫  
文庫 18  
91





延平八

原題簽二非六

沐浴名取川

本  
字  
取  
川





名取川を仰る白春

祝初

李江維舟

御前呼遠草此宮佐渡七番  
次第乃志久や言色木拍子

等 七種

云々為事此七事や七福神

汎 梅

聖旨師や教百乃在乙時小梅

飯蛸

飯蛸のいんこは是榮螺から

活 白魚

白魚や雲小阿ふちや花

柿

新下つていんこ柿り大ざくら





心通阿ふや小雨まは風柳の左

文 女 歎

鬼窟出といふ妖霊封しつり

沙千

住吉小一園出まふ今此海

花

地之のむ尼西条の橋ゆく世に

汎 清ありて

花見塔を鏡下居乃夜晴や言

ナニと給馬こと名答言哉

清水や長谷川久花巻乃流

地積もあつ是もあつこ月と花

ナニと給馬こと名答言哉

似と書色清きふりまの世も言

大原路旧跡

西に法師月よふや松ぬ庵の

汎 山より海ありて

花巻を横川の僧歌い見甘

阿らむむむむむむむむむむ

枝珊瑚

扱ありよふやあちよふ花も道人

あふら加ちを原とえいふおの山

自留自ま里らくやあん此橋

汎 橋

海たり一橋成尼道い春毎小

法室此花よ女此多く見し

山を梅物い子花や昔帝の内



新店し祝

尼店小家具いさあしり

若

風乃剣後の何とや

首夏

海を一事と見やこゝろ交今日

新樹

勿論之は心も夏木立

卯花

夕も此雪乃妙室や床此

杜若

ふくさ程いあり茶の湯や

初鯉

あや鬼作子指那ハ初鯉

郭公

うね八百人傳るれ郭公

哥

人乃山浜江をえきう川子観

去波能此因産さきしし時鳥

数も羨くとおける人

大坂や央る道はかきま

置魂雨たき拍子ハ五郎治

橘

花さちこれ今此清袖の香

五月雨

五月雨の霙句や大方板也



早苗

うふれ田や暮盤乃田石と成

蚊屋

幸方其人肩あきしげらと

界をよして二つや京の蚊屋

虫

池廣し虫ちいさい光を乞

藪

奇よし路よそ

流るすといふけやあづら

藜

藜破急げ明石此むまや路

松子

松子の客義尼上川巖乃肩

障泥馬蹴

仏

上清美りて無行

言えき何れれの水此節まゝハ

奇 白雨

むら路よ降夕まや志らぬ

奇 砂糖水

大白を濃尼乃小川砂糖水

扇

砂子地を石扇扇う汐風

細涼

帆 致る師と亭

涼風よ海して風の人らみ

清氷弦

爐小猶手はらとらぬ岩信水



御後

洗車洗可交

御後園子味喰付付ぬるや

白小きて

初秋

市邊子魚乳そのころけさの

哥 七夕

舞けん心持はらち余の星

躍

阿ら取や後人志次踊哥

舞

自然舞け花枝あしり

されちちやえをを舞え

朝顔や宗祇のま川た

萩

萩をあそ曾路里り出えか

萩

交遊踊あて

二女狂ん鹿や娘と秋めあて

哥 女郎花

哥 花紫

哥 花紫

野老の幕やんあて

萩

廣えん花紫や香計走り

歌 若姫さま

あまたといんやう舞小ま

野菊

め歌



仙臺人無好

中賀北浦や日和を天加ら

鞋 佐川と野

江戸一番物産乃名や坂東

越後鮭おふ其近衆ふ加加ら

一雁 梅津

八景句堂や挙句秋風

麻

康小田の安山子や此上手

駒込

少将の役を技をて

岩おのこ鳥智おのこ

月

駒込か

幸崎乃芳枝をえ

萱の朝露月乃此信守や

姨捨山を此捨く

住吉市 あら月

江乃人目除るれ宝乃市

蒲萄

申京大ま此ふ

今乃世此名小大宮の

本堂草

夏をせら阿ら

人をも此

五葉木

島山や松之五葉木百人

前



新幕表

新地之や志川心くを懸

奇 雜秋

武為跡のちのり風乃

奇 未仕落

老乃秋や宿枝立出て

道具んせ

初冬

奇 山崎のあまの神五森

奇 山崎のあまの神五森

奇 山口切

神道

山口切の今日あまの神代の神より

奇 山崎のあまの神五森

未仕落

木葉

貧僧やせめて木葉たあん

神道

未仕落

三月一日神の法系

まがらやるふく白の神

神樂

延

山崎のあまの神五森

奇 山崎のあまの神五森

未仕落

山崎のあまの神五森

奇 山崎のあまの神五森

奇 山崎のあまの神五森

山崎のあまの神五森

未仕落

奇 山崎のあまの神五森

未仕落



砂葉や夏にて雲子  
短き鯉

茄子は老に志すもの  
汁

料理もやあしく  
市果

村野笑へる  
市果

平治進多指  
中さんや八所治部  
乃

可  
米物痛え起こ  
子

池に阿そ  
鴨は花に  
風情

都鳥

哥 角田川

祇園八坂清水  
都鳥

綿子

長き綿子  
乃旅

由扇氏  
後徒

湯治事  
慕乃長

屋上  
乃

文  
乃

古き  
乃

湖水討  
乃



哥 昔年序候

世にそはる人目も甚し木を

年志 枯ぬ時

南膳部州城思ひて

此國や百から縁を年志

除取

哥

逐出凡何不鬼のすん

詩 歳暮

新米一石價小判や年

心る物

名取川次郎百自春

元日

洞 土器なりて

蓬萊や霞うきん志は糸

花開

遠物此石金を流や花開

奇梅

何乃有そもい言も法存

管

日蓮宗追善

花や布施後の法法乃おの

初齋

祝 江島白粉にまきりて

初あやせに後五百勤乃王



氷  
江戸山也

溜池ふ春や水此晶遠  
世

天玉寺甚々民成助  
柳

加賀館系尾無行

客ハ燕心亭主あり山や系板

哥 系板

柳の枝とせし何志よ近知板

花

國何進ハ山ありを何り登句

花や知京の目き入田舎口

鄙人ハ腰乃と屯や廣い京

富士此雪成廿計や熱の屯

花多又其方野や哥此新古

方鼓亦けり人乃許り今

似我踏走天やと出く花

哥 遠路小  
これ中

花地らぬ遠北路出僧やを

類引つまゝ遠向と人よ

黄子金や屯を京此縁の屯

丸山や白か称を冬花見  
月

哥 醍醐小く

山里名物乃はみぬや浅也

枯枝つま京成かへ可也  
乃山

花そ笑山家お花集  
酒花文



梅

相臺乃一無我

客碎り波老此海あり世

江府植路あり

海乃席冷氷うきり

哥 藤

いとや夜見さきそふ海あり

款冬

山あふや春いぬる遠だ

詩 首夏

暑や夏や夏小入くハ平

新樹

案乃外此及長のや苑の

哥 余花

餘花とん男やまめ

文 杜若

言ふ名や与士とる句此り

汎 郭公

日あけ多また初子祝

卯花月夜取めい志

東山知積院あり

根来松乃音云詩多り子祝

雨布や男日照乃不

ふと多雨や流生

橋阿の冒魂阿の果

文 天竺

山又海より何進此



日吉冬示

水や又若及秀乃五多七社の

足指 神雲

今日や先道理成責取

舞 競馬 足指

乃心乃競馬何まて中し

祀 菜玉 やさ男

皇女玉や逆波世成意結り

致

何小り一致小り一栢也

螢 子ま菜

螢ちり中瓦能もあま水鏡

地細

地あま小沖乃瑞も引ま

一物箱

油老よ葉よ白地乃綿 一物箱

哥 出用子

香久山り小袖乃山り夏産

哥 抱籠

亡心てハ雪女り冷抱籠をえ

文 扇

袖扇雪出を以能海持娘

油深

祀 折立能りて

夏や油堂言然去るす寸毛

中乃古用風と秋葉や志川

清枝

人形や瀬こみ物り流川



初煉  
秋也今朝一足に知乃こいらん

相  
海相や大海哉志并乃内ハ

星小此言思羽哉世天川

百味阿里也十弟信志乃

相横  
因隠居有雅乃世や相横と

芭蕉  
七世哉系八套行世とらあ

秋  
秋の心ハ是は前々物也ハ

新

那屋住乃小秋う高いかい

姉蘇や高おまをぬ  
女高也

野分色や懐へし女高也

舞難釣  
覚んハヤ世節と系かは

山庄老とや哉  
朝野大山と釣や金乃

小鷗引  
小引哉引と狂葉ハ

中納言夜消息を言也



仙臺方石之文月や世まきの  
判

返心寝元すかたや地ふい

席

秋鹿重一二三をり堂

旅泊

室をり妻志席此被枕

月

仲丹分は是回ふまへ

いんをめ志あふ箕の面此

不ふ満うそ 流望月

廣海のいける百迄月見や

奇礎

からしく砥り磨り地りも

奇 鬼灯

布うつ交いふけるから燈を鳴

汎菊酒

たいら花や菊枝たへて

酒 蜜柑

云後道取早ふた出川

奇紅葉

柴かや赤毛花大車毛く

雜煉

野乃宮此秋や佳色

冬

初時雨

初時雨板屋や志も縁庇



水仙

境子ほろろ

水仙や紹興利休色下り

初冬

大名や冬を短夜夜流

下中

心んの雪冬に流るり

ぬめ子

哥 軒友玉

かこや月をたらい文乃

山

曆卷

梅壺乃梅や曆卷方ちりも

哥 蟬

いせ崎や岩かに揺れ玩

鯨魚

鮑

深合之多分小流く一

栗降鮠

鯨魚

深竹や玉れりりも作らむ

鯨魚

鯨魚を是ふことと志とや

鯨魚

菩薩北行

哥 海又をらひ中の方へ云信

遠あつたてて飛うり

哥 柴漬 又謝乃鯨魚

あつちやあれ下あつた流

生流前

さきにあえ小豆流之赤流

煮

哥 氏江あえ



三ヶ路此頼むや夢ふ

訊 狩場雉 在馬

何事申へともいそかきし 狩場

鴨 乃雉

やうらくを水菜や鴨の心知

哥 冬菜

冬菜をそぼろやあらし

雲 今何とてを

いど何れを云能自哉

雲 板屋あま

月雪に當りや伴丹と鴉池

温げ中といつこと

おもしろ

電やこれ老やせんむ

雲乃電

煤拂

大海や都下をくく煤拂

哥 餅築

云ちつたり民乃電門の扉

訊 年忘 戸ら

又誰や忘るく手成ふ隊

又 誰を 電見

追うのあまなるかあ 鬼れ豆

雑多

料理何れ残れ冬なり

旅もあ



延寶六年中秋勢弱

於山田原大神宮奉納

三十二句

歌 鈴麻

維舟

院淨現踏踏 鈴竹や鬼の

まき

哥 阿野

だてや津屋をみそ昔久

松男

文 新宮

はるめや新此よりい

冬印也

文 兼冬人多交就

笠や霞能縁のより

環奈

を法海やを交川乃月を

岩と山宵を雪を也作

月と丸中夜も中たる

河記建縄

哥 津雲濯川月やとれと

新山

秋乃月世小唱流るや

新川

相ありや山田乃急此秋

夏小こ持時多取初

丁流る大淀のよや

哥 神道山

本を色持うよ上を

汎 西行谷 此月松

麻乃星白くと見申る

白也



濱萩やるんぞく此帆立貝  
濱萩の古小社久保物終  
懸るやいせ是秋小親子つ

海老の腰やい川衣初月いせ  
乃海

生浦  
是利末生乃津山一貝並

短哥  
海土此命拾ふ物あり初垣貝

秋首や是えかこえたいせ

二つあゝ古や津義を筆乃笛

秋首やたぬ日何事といせ

執筆もや百枝乃雲此秋の吟

海乃二見再返の句や秋乃浪

哥 一志文章真行

寐えとぬやあゝの冬よけ中

名月 武蔵末津日 萩の菫

いせとめんそ若くは廣一

訊 梅倉武周日 月此幅

神系や今人偏小秋

高田武有日

神秘に中枝の楊枝手

綿屋文吉日 乃事

月沈り伊勢をなれとかい隣

高田武辰日

清法男獨志や月見さの



菅木田氏跡に尋

いせ権毛加元の卿や秋北水

木乃尾二休亭ふくふ屋

いし三益、龍工能潜

十重句瓶部をけり昔時

大永二年太神宮あり

法承乃建号十句宗長

宗願西吟宿り能中一能

亮句計也 細川宮國守下

朝日親四方小自人親鹿成

中十乃亮句計也三四宗

道定院後継也

院了東の月弓親宮居

那

仔細中白能十重句月之

朝熊禪金剛造寺 満月

一了りや西吹秋乃 風之法

月以野向政安真也

神風や雷此晴後留士 朝熊

山田連之能才明星此

茶屋處酒を世終ふ

阿の山よしの明星十也

ちんり



進加

九月上旬三方福井氏  
未起連致無行亡父  
未秋由重周信りたれ

秋由重周信りたれ

菊乃落

延寶三二年九月と旬

外宮奉納

可也

維舟

訓

岩戸山や新河の橋を

いせ人の川を公草乃笠

五葉の月ふき裡句哉

既小言まを廉乃由也

紫垣や楊乃皮垣阿ち

雪乃波の風りまあはる

207/114



う  
意の梅思ひ乃年たちあか  
片言あしふうをひすら  
出聲も都訓ある意聲く  
たひさあひのさへまの  
橋人ハんうこちやゆらん  
らんお記甲斐のまの  
いさあまの家の  
か乃中羽のかさこめ乃  
誰ゆいハれははきられ  
今ハの念拂すめま  
と最多文花軍場や月の  
猿沼也を狂ひ能  
んそ

名  
鱗の愛餅と得るまの  
阿さのちあれ女はあ  
沈丁花一厨乃前あ  
東はるき既五路地ふら  
待極いふやいふ  
更ゆく加藤のあん  
老らくれ藤ええん  
まらあわらう月の下  
秋風ふ加丁の  
菊もれやふ露れぬ  
其名の袖ふ  
守り力ふ産



神者宜祈りあらん日とて  
竹達一あらん砂流之  
若拂一嵐のふん気圍  
血此嬉一在哉密候  
取ぬへ花聲のねや  
春は祝ふも言ふ酒  
昆沙門

延宝六年九月上旬

内宮女子御

一哥仙

羅舟

萩乃あふ世に天は  
雑波の芦鴨秋ふる  
幸は小酔乾八月此  
なほ所んまはたんと  
遠道色近き若ゆ  
定乃学ふも師之遊



う  
登るめて葉るの枝や心めん  
か海波京北肩は交阿ら  
くろけふも連続草けぬれ  
すくうろよも懸る懸る  
一花乃ち心けいや所 意は  
天下此表を 湖も空陰  
住者乃汝に西此海少  
取進出 砂乃を海を  
多上の金山の夏も  
袷の川を 新衣家織  
日無日気源 一正下方  
細粒も雲行 毛の ぬか  
ぬか

名  
忘ぬや詩皇出く此文詞  
志乃るも心あへん恋  
今八只おもも気給 花 屋  
夜も何時そ半ふけゆく  
何小志る邊人ぬゆ引る意  
皇ら加わ下又も新田海  
秋葉も外山乃 菊 初時雨  
里輪乃 積翠 意を乱る  
月もろくぬの泥魚追ふ  
阿乃山岩陰ハ横た 了 子解虫  
朝朗雪道すべ成葉研谷  
山を笑心せぬ花をた



けり けり けり けり けり  
す けり けり けり けり けり  
す けり けり けり けり けり  
す けり けり けり けり けり  
す けり けり けり けり けり  
す けり けり けり けり けり  
す けり けり けり けり けり  
す けり けり けり けり けり  
す けり けり けり けり けり  
す けり けり けり けり けり

延寶見六年

於兼庵

二哥化

遊舟

桐乃多也日今小庵紙

半風長秋小涼 あま 室

夕予昔者空虫鈴虫 あま 織

月や水精花乃うい言 あま 何

木をよもろハ口成得 あま ち

夜成ん あま ち あま ち あま ち あま ち あま ち



臨海に能く野道老に西の  
阿乃川を我下堰運くの  
雜喉筋乃飯の思ふ所  
其小紀乃森乃志の  
一寐入流の思ふ所  
多しきかえんは明の  
小松のそ業はしるる  
き歩小判のまの形見  
鏡波山は西波の浦乃り  
岑よのたはるかや  
は世にてんせやるを  
月ら此見言の対

名  
物まの情話成る可  
いの掛帯の思ふ所  
衣折の紗綾と輪子  
白粉伽藍のあき  
琴の音に思ふ所  
思ふにあらぬ文乃  
海川小右の思ふ所  
伊代中を思ふ所  
稲庭志を思ふ所  
鶯乃を思ふ所  
上建を思ふ所  
志小の思ふ所



ウ  
なほめは地ら地らく  
まのまの  
まのれりし床 横交  
舞妓と我連ぬまら  
砂のるはまは 神堂神  
若いそ金澤較古や  
場は取物も 花乃  
乃ま

延寶七曆二月上旬

於里谷夜餐

三河他 固朋之入道

別控あふのま凍 氷采

百合乃あまは八乃 宗隆

白雨はまの 維舟

急ぐまのまの 舟

若さくはあはれ 隆

たやまのまの 舟

音也







う  
秋乃風木葉役者此れ  
明日毛茶の湯乃其地  
下屋敷持を苦あり  
奈り人乃衣をぬる中の  
此や白粉をまき  
梅乃白ひり他  
あらり

如宗十二  
宗隆十二  
維舟十二

延寶七年三月中旬

醒頭奇 哥仙

法橋維舟

枯木毛乃乃加  
我之花忍  
大小の  
尾毛  
清上  
金銀乃  
高け



少夜とそめ我待ころやと  
落胆なまや山火焼の身六  
所こ此なかんてくけ朝一種  
塩子成りけて住よ一境  
教い海ご様通く和言吹よ  
おまお語も長閑る廻り  
おく極いつり長月定の内  
学考人乃哥や限乃乃音  
凡そけとら此白波も詠田歌  
岸崩るらん縁雨ぬれ  
ふの曇る月見ハ橋乃乃  
待遅居乃羽身中此ら

<sup>名</sup>玉成りり厚小回ま一統衣  
田地とあし成もあて此記念  
若後家と何あつらぬゆも口  
び今もあつらえそち推いやの  
落る所も枯るも是世此  
糸る流せの又乃清肉ハ  
をのがは此西心をこけあこ  
あき家も若福康成う地む歎  
いそきやあつらへりや此ら  
人信あつては、やまも物心  
這まの月残宵けり物心  
崩えちぎらちたあろく



得手小帆の秋風吹り室  
都乃かき居たり礼平乃舟  
雪北のこころごとく  
拵へていへ家すまひたり  
花を児山降成るべといふ  
出ぬ水も冷ぬ秋の葉

延慶七年粟月十一日

施頭白 寺仙

孫真

雲海心阿らん幸時乃

有雨比良秋言雪

冬はよむの雪難のあり

息の結ぶ春日日にを眺

月はくもるさへ影にふり

天柱を多敷を此花也乃

音韻を序にがやく



中びさるゝ物小狂家おろし  
昔まは生枝又けて出あふ  
判朗流の川ふたは平を  
恋乃別あまうかお情  
懐言堂が借残なりし形  
年比皇神くこと海都よ  
親世流眼をえたるむを  
小菊もめ成る甘茶のたれ  
出まき世玉の法子とそ  
月ふさり日ありき  
いふ一のたまは花言う  
崎臺ふたで温ゆんちう

名  
今りこころ初智祝水祝  
神代の恋をいふ出ま  
大社寄てるまかん柳あや  
舟子の碑乃分ゆりもを  
あまねく是来るこは筋  
夏魚ならふ小鱒小平月  
快くをえいさよの松を  
黒谷乃山枝序たが  
佛連利もと花も有明  
言さく笠ぬく春乃道つぎ  
下馬まらふ阿ら雪け  
おく程本一茶存乃生垣



なすめける振の袖下びら  
志すよふまはるに細りんを  
縁あけ山のあるこの  
阿内りよふの友をさるん  
正奉此源氏成すふ秋も  
ふせある世長志と  
橋忠

大寶七巳未年

元日

江翁

去乃際や暖始一思案

乃之下ふからふ人乃燈扇

出登成洗濯衣を  
杖

同

若いさ一全体む之今日乃

乃めん其をな遠草乃花

樂乃舟めるむ洲浪の山

同

周乃代を掛朝や八百人

出さ乃木弓弦糸を  
杖

春之雪らせいの神



延寶八年

元日

雛舟

又の如くや清代乃味ひ

春の流

春不ぬ〜と緑の腰府

大子く

常なるそなた音ハ

杖  
跡を尋ふ

昭和十三年八月廿一日

九月二日字了

酒井文原下らん







